

リコー 飯沢さん（座長）：

-二つ目以降の相関性というのはどうやって調べるか
想像はつくのですが、プロセスの先頭のアイテムのアクセス
頻度はどうやって調べるのですか？

（答）なにかアクセスログを取るような機構をクライアント
側に作っておいて、時間的に集中したアクセスがあったら
その最初のアイテムをプロセスの先頭のアイテムに対する
アクセスだというように判断して、サーバ側で統計的な
処理を行って、相関性や先頭アイテムへのアクセス頻度を
決定することになると思います。

京大 田中先生？：

-提案方式のスケジュールは最適なものにならないのですか？

（答）かならずしも最適なものとは限りません。あるデータ
アイテムを放送したら、そのデータアイテムをアクセスした
クライアントは、また相関性にしたがって新しいアクセスを
発行するので、後々のスケジュールまで見ないと、最適な
スケジュールは作成できません。この方法では過去の履歴のみ
を見ているので、その時点では最適ですが、長期的に見た
場合は必ずしも最適にはなりません。

-あと一つ、アクセス要求発生の間隔は、クライアントの
アクセス履歴によって、大分かわるのではないのでしょうか？

（答）そのとおりです。今回は二つのデータアイテムの組に
ついてのみ、時間間隔の確率密度関数を規定しているのですが、
もちろん、A,B,Cというアクセスの場合のBとCの時間間隔と、
D,B,Cというアクセスの場合のBとCの時間間隔は変化する
ことと思われます。

筑波大 石川先生：

-この方式はデータアイテム数に対するスケーラビリティは
どの程度あるのでしょうか？

（答）提案方式は、各タイムスロットにおいて放送するデータ
を毎回決定しておりまして、計算量で言いますと、データアイテム
数と、確率密度関数が値をもつ範囲（タイムスロット）をかけた
ものになりますので、データアイテム数に対しても十分な
スケーラビリティはあると思います。

奈良先端大 吉川先生：

-具体的な応用というのはどのようなものになるのでしょうか。

（答）特に規定はしていませんが、例にてあげました通り、
衛星などの帯域を用いたデジタル放送におけるWeb配信が
挙げられます。

-ということはデータは静的なものを扱うということになりますか。

（答）そうです。本研究ではデータの更新はないものとして
おりますが、実際には更新を考慮した研究が行われており、
もちろん更新を考慮した研究は今後の課題としてあげられると
思います。